

が目には浮かぶ。以来ずっと、子どもから子どもへと読みつがれてきた物語である。時代や文化は移ろって

竹内敏晴著

## 『子どものからだごと』

も、これからもそうあって欲しいなと感じるのは、私のうちなる郷愁であらうか。 滝川一廣

ある日、小学校低学年の男児が抜毛を主訴として母親に連れられて来院した。何回目かの母子同席面接で、母親は子どもに「ことばで言わないとわからないでしょ！」と悲痛な声で子どもに自分の不安をぶつけていた。親は子どもを前にした時、言葉を介さないことには、子どもをどう理解してよいか、大変困惑してしまう。

子どもにことばの遅れがあったりすれば、それこそ親の不安は大変なものとなる。高度に情報化された社会では、ことば（話しことばや書き

ことば）に対する依存度がきわめて強いがゆえに、親の不安がなおこの膨らみやすい。親はどんな方法でもよいから、とにかくことばを話せるようになってもらいたいと切に願う。

そんな親子の関係に光を当てながら両者を支援していると、子どもが話せなくても日常生活では切実に困ることはなくなつた、といつの間にか親が語り始めることがある。そのような思いに至ると、子どもに生きるとした言葉が少しずつ芽生え始める。そんな臨床経験を積み重ねていくと、人間理解あるいはコミュニケーション世界の基本を支えているものは、ことばではないのだと改めて気づかされる。

人間相互理解には、身体あるいは情動といったものが深くかかわって

いる。二者間で一方の人のからだの動きや情動の響きは、他方のそれに共鳴していく。人間相互理解の原初的形態である。われわれのからだはもともとそのような働きを備えている。このことは言語的体験とは異なり、意識化することが困難であるがゆえに言語化しにくい。それはコトの性質上当然ではあるが、いまさら言語化するまでもなく、われわれにとつてはもつとも実感として捉えられる体験であつたはずである。しかし、今や若者に限らずわれわれのからだは死に瀕し、からだを通してコミュニケーションは容易には成立しがたい状況にある。

本書は、対人援助を<sup>なつか</sup>生業とする者たちのあいだで幅広く読まれていく『ことばが劈かれるとき』の著者がその後の五年から一〇年のあいだに書いた文章を集めたものである。およそ二〇〇頁あまりの小さな本であるが、著者のゆるぎない主張がわかりやすいエピソードを交えながら簡潔に述べられている。しかし、ひとつひとつのエピソードのもつ意味はきわめて重くこちらに響き、容易には消えていかない。

「太初にコトバありき」に象徴さ

れるように、ことばを獲得することではヒトは人間人格になると考える強烈な西欧的人間観が、わが国にも浸透することによって、日本人が本来有していた「からだとしてのことば」である「胸に沁みる」「腹にこたえる」「腑に落ちる」「ヒトの身になる」といった繊細な感性が急速に失われつつある。そんな現状を述べながら、みずからの援助実践を通して、「主体としてのからだ」を取り戻していくことが、その人の世界観そのものを大きく変えるほどの劇的な体験となることを、多くの例を挙げながら描き出している。

小さい頃誰もが遊んだ経験のある「かごめかごめ」を例に出し、ここでいう「かごめ」とは何を指しているかと思うかと、読者に疑問を投げかける。「<sup>かごめ</sup>」「カモメ」「<sup>かごめ</sup>」など、さまざまな意味を連想させるが、そのような多様な反応が生まれるのは、その遊びの際の自分たちのからだの動きの中に感じるイメージが蓄積されて、ひとつのことばを重層的に了解させている。このように「もの」とは、存在するだけであって、ヒトがそれに附与する意味は無数にありうる、つまりは多義的であ



竹内敏晴  
子どものからだごと  
1983年  
正文社、1400円

るのだ。

精神病院で盗癖があるために迷惑がられている患者の例がある。看護婦（看護師）が患者の買い物に付き添って出かけた際に、患者が思わずキレイに包装された石鹸や歯ブラシをいくつもバッグの中に入れてしまった。看護婦がそれを見て、みんな要るのかと尋ねると、ぼく持っているから要りませんよ、と患者は答えた。看護婦はすっかり混乱したというのである。思わずバッグの中に入れた時の患者と石鹸や歯ブラシとのあいだには、なまなましい直接的な関係が成り立っていたがために、他者の入りこむスキはない。その一方で社会的な約束事としての生活に必要なものを「買う」ということの意味もある程度は理解しているという、二つの次元が分裂したまま共存している例を述べている。

この例に示されているような「もの」との直接的な関係は、自閉症の子どもたちにおいてもっとも顕著に認められるものである。対人交流を通じた文化的営みから身を引きがちな彼らは、生々しい感覚世界に身を置き、外界とかわり合う際に、このような直接的な関係となりやす

い。そのような感覚世界を感じ取りにくくなっているわれわれは、社会的約束事としての「ことばを介したコミュニケーション世界」で彼らとかわり合おうとする。そこに両者の間に大きなコミュニケーションのずれが生まれてくる。しかし残念ながら、いまだコミュニケーションは後者の次元で語られることが多く、「からだとしてのことば」が念頭に置かれることはいたって少ない。

発達障害といわれる子どもたちの中で、養育者や現場の職員が関係が取りにくいと感じる例が増加の一途をたどっている。そのような傾向は、広汎性発達障害の疫学的研究でも確かめられている。しかし、関係が取りにくいとわれわれが語る時、その関係とは多くの場合、コミュニケーションの媒体としてのことばでの表現が乏しい、働きかけてもこちらに乗ってこない、といった意味合いが込められていることが多い。つまりは、子どもたちにコミュニケーション意欲やコミュニケーション能力の問題があるとする一面的な見方が取られやすい。

本書で一貫して強調しているのは、著者が話しことばを「からだとして

してのことば」と見なしているように、「主体としてのからだ」は常にその人のその時の気持ちのありようを如実に示しているということである。まさにそこに、その人のからだを通じた表現がなされているのであって、それを感じることなくして関係そのものの成立の可能性など生まれるはずもない。からだ全体でかわり合うのが怖いと叫んでいる自閉的な子どもを前にして、話しかけたい意欲がまるでないと言く教師の例など、思い当たる経験をもつ人も少なくないであろう。

医療現場の行動中心の診断学的枠組みは、いまや保育、教育、福祉のあらゆる現場のみならず家庭にまで浸透し、子どもの行動特徴から何が異常か否か、という冷めた客観的態度

エーリヒ・ケストナー著（高橋健二訳）

## 『飛ぶ教室』

本書は一九三三年にドイツ人の作家、エーリヒ・ケストナーによって記され、出版された。私はこの本を中学校の一年生頃に読んだ。物語の

度でかわろうとする人たちが珍しくなくなっている。子どもがからだ全体で表現している「からだとしてのことば」は、徹底的に黙殺され、療育という名のもとに、われわれ大人が理解しやすい枠組みの中に、結果的に子どもを押し込めてしまっている。そんな現実を思い浮かべながら本書を読んでいくうちに、大人が「共生態」としての、つまりは根源的に相互に響き合う「からだ」を取り戻す作業の必要性を強調する著者に深い共感を覚えると同時に、自分を含めわれわれが「からだとしてのことば」あるいは「感性」を取り戻す、あるいは鍛え直すことがどうすれば可能なのか、われわれは重い課題を突きつけられているように思えてならない。

小林隆児

展開にハラハラ、ドキドキしながら一気に読み子ども心に感動した。こんなにもしろい本があるのかと思いき、そして「こんな学校があったら